

**府立東豊中高等学校**

電話番号：06-6831-3045

Web:<http://www.higashitoyonaka.osaka-c.ed.jp>E-Mail：[z-higatoyo@sbox.osaka-c.ed.jp](mailto:z-higatoyo@sbox.osaka-c.ed.jp)**主な研究テーマ****「相談体制の充実と地域との連携を通じた生徒の学習意欲の向上」****I 学校の概要****1 創立年度** 昭和46年度**2 教職員及び生徒数**

(1) 教職員数 40 人

(2) 生徒数

|     | 1年 | 2年  | 3年  | 合計  |
|-----|----|-----|-----|-----|
| 学級数 | —  | 6   | 7   | 13  |
| 生徒数 | —  | 236 | 266 | 502 |

**3 教育課程の状況**

普通科高校として、3年生では、文系・文理系・理系のコースを設定し、平成15年度から週2日の50分間7時間授業を実施している。学校設定科目(16科目)を含め多様な選択が可能となる教育課程を設定するとともに、基礎基本の充実をめざして、英語・数学での少人数展開授業を実施している。さらに、英語・数学・地歴科などで、講習(早朝・放課後)を実施し生徒の個別の能力に応じた指導を行っている。

**4 研究開発のための組織**

分掌などの既存の組織と有機的に連携を図りながら本事業を推進するために、新たにプロジェクトチームを設置した。校長・教頭のほか分掌・学年を横断した形で10名前後の教職員を募った。

**5 評価委員会の構成**

学校運営の改善を効率的に検討し、協議内容をより深めていくために、評価委員会を学校協議会と併せて設置した。委員として、地域自治会関係者、地元市立公民館職員、地元中学校関係者、地元行政組織関係者、本校卒業の大学生、本校PTA関係者に委嘱した。

**6 育てようとする生徒像**

地域にしっかりと根ざした若いリーダーとして、時代の変化に対応しながら、さまざまな情報を収集し、適切に分析し、正しく判断し、主体性を持って行動できる自信に満ちた若者を育てる。

**II 事業開始時の生徒の状況**

入学者の学力は中位程度で、90%以上の生徒が四年制大学、短期大学、専門学校に進学していた。長期間にわたって、この状況や実績内容に顕著な変化は見られなかった。このような状況の中で実施した学校教育自己診断

では、生徒は学校生活全般に関して高い満足度を示し、体育祭・文化祭などの学校行事や部活動などには意欲的・積極的に取り組んでいるが、その活力が学習意欲の向上には十分に結びついていないとの結果が得られた。たとえば、生徒一人ひとりの進路希望と実際の進路先を比べたとき、希望に向って現状の学力を高めようとするのではなく現状の学力に合わせて妥協してしまうような傾向が見られた。また、規律を守った生活に適応しきれない生徒も一部に見られた。

**III 事業計画 (PLAN)****1 主な取組目標****A 学校生活を支援する相談体制の充実**

進路や生活上の悩みに対する個別面談等の充実

教育相談週間の設定(年2回)

**E 思春期の生徒の課題解決に向けた多彩なアプローチを学ぶ教職員向け研修の充実****I 確実な学力を身につける学習環境づくり**

教員への授業に関するアンケートの実施

生徒への学習に関するアンケート(授業評価)の実施

公開研究授業の実施

全教職員による登校指導期間の設定

**U 地域の団体・組織等との連携・交流活動の充実**

小学生・中学生との交流活動の充実

地域での交流体験の充実

**W 大学等の高等教育機関、民間学習機関、福祉部局等の連携先の開拓****2 主な成果目標****A 教育相談週間等への参加者数の拡大(1年次30%増、2年次10%増をめざす)****E 進路相談利用者数の拡大(1, 2年次とも30%増をめざす)****U 第一進路希望の実現率の向上(90%をめざす)****E 遅刻者数の減少(1年次30%減、2年次30%減、3年次10%減をめざす)****O 学校生活・授業満足度の向上(2年次10%増、3年次10%増をめざす)****カ 部活動への生徒加入率の向上(80%をめざす)****キ 部活動成績の1ランクアップ****ク 各種選考会への候補選手の被選出数の拡大(10人をめざす)****ケ 交流参加生徒数及び、参加中学校教員数の拡大(生徒数1000人、教員数50人をめざす)****3 目標の設定理由**

自分の能力を一層高め、より高い目標に向ってチャレンジしようとする意欲を持った生徒を育てることが、本校の課題であった。そのためには、進路の実現に向けて学習に集中できる環境を整え、規範意識の育成と学習意

欲の向上を図る必要があった。

具体的な取組として「相談体制の充実」及び「地域との連携」を重視することとした。

- ・ 「相談体制の充実」では、学校生活での生徒の健全な成長を促すこと。「地域との連携」では、地域の人たちとの交流を通して、生徒一人ひとりの達成感や自尊感情を高めることにより「地域のリーダーとなる」という自覚を高めることとした。
- ・ 平成17年度は、「生徒に関わる相談体制の充実」「地域の団体・組織等との交流活動の充実」「多彩な取組につながる新たな連携先の開拓」などを目標として設定した。
- ・ 平成18年度については、進路の実現に向けて学習に集中できる環境を整えることを重点項目として、「確実な学力を身につける学習環境づくり」を目標に追加した。
- ・ 平成19年度については、2年間の取組の成果の上に立って、それぞれの目標についてさらに踏み込んで取組むこととした。さらに、本校と少路高等学校との再編統合により、本校の校地・校舎にできた千里青雲高等学校へ本プロジェクト事業の取組・成果を引き継ぐことを念頭に取組んだ。

#### 4 教育実践計画

##### ア 平成17年度

教育相談週間の設定などの相談体制の充実

思春期の生徒の課題解決に向けた多彩なアプローチを学ぶ教職員向け研修及び視察等の充実

生徒への学習に関するアンケート（授業評価）の実施

地域との連携・交流活動の充実

##### イ 平成18年度

相談体制の充実

教員への授業に関するアンケートの実施

高校生のための親学習「明日の親のための講座」の実施

地域との連携・交流活動の充実

##### ウ 平成19年度

生徒に寄り添うための教育相談を中心とした教職員向け研修のいっそうの充実

進路個別指導の充実

生徒への学習に関するアンケート（授業評価）の実施  
公開研究授業の実施

地域との連携・交流活動のいっそうの充実

#### Ⅳ 事業の推進と成果（DO）

##### 1 教育実践の概要

###### （1）相談体制の充実

学習意欲の向上と充実した学校生活を実現するために、教育相談体制と進路相談体制の充実に努めた。

##### ア 教育相談体制の充実

教育相談においては、「相談室だより」を毎月発行し、昼休みに担当者をおき相談室を開放するなど、常に教育相談活動が生徒の身近に感じられるように配慮した。そのうえで、本事業3年間の目標を次のように設定した。

H17年度（1年次）：教職員の気づきを促す

H18年度（2年次）：教職員の理解を促す

H19年度（3年次）：教職員の新たな行動を促す

平成17年度については、11月を教育相談月間として生徒たちへの広報を強化した。1年次の目標を達成するために、当時本校配置のスクールカウンセリングスーパーバイザーであった八尾勝氏を講師とする研修を、この1ヵ月間に3回開催し人間の心理に関する基礎事項を学んだ。なお、これらの研修については、生徒にも参加を呼びかけ、合計31人の生徒が参加した。

H17.11.11 「自己理解のために～私はどんな人（エゴグラム）」

H17.11.18 「ストレスマネジメント」

H17.11.25 「心の知能指数（EQテスト）」

さらに、教職員の心理学関連の技能を高める目的で「箱庭」を購入し、これを活用した研修を行った。また、旧第1学区の教育相談担当者会議を本校の職員研修と兼ねて開催し、教育相談の重要性について理解を深める機会とした。

H17.12.9 「軽度発達障害の理解と対応について」

講師 臨床心理士 八尾 勝 氏

H18.1.27 「箱庭について」

講師 臨床心理士 八尾 勝 氏

「エゴグラムから見た自己理解」

講師 臨床心理士 足利 学 氏

H18.2.3 「箱庭について」

講師 京都文教大学心理臨床センター

専任研究員臨床心理士 串崎 幸代 氏

平成18年度については、1年次の活動を引き続き行うとともに、4月と9月に教育相談週間を設け、生徒たちへ教育相談のいっそうの周知を図った。また、教育相談委員会を毎月開催し、各学年の生徒の状況について情報の共有を図った。さらに、相談室だけでなく保健室とも綿密な連携をとって生徒の心の悩みに対応した。そこで判明した不登校生徒について、当該学年と教育相談委員会を中心に校内体制を組み、10月から2月までの間、相談室への登校を支援した。

さらに、教職員を対象に、生徒に寄りそう教育相談の実践的手法を学ぶために、心理に関する知識と教育相談活動技術の向上をめざした研修を実施した。

a スクールカウンセリングスーパーバイザーによる

研修 講師 臨床心理士 八尾 勝 氏

H18.6.15 ケース会議

## H18.12.14 ケース会議

## b 精神科医による研修

講師 精神科医 赤垣 伸子 氏

## H18.10.3 「相談室登校の生徒への具体的支援」とケース会議

## H18.10.31 「精神科医（医療）と学校でできること、できないこと」とケース会議

## H18.11.21 「軽度発達障害が疑われる生徒、相談室登校の生徒について」とケース会議

## H19.1.16 「軽度発達障害の理解と支援」とケース会議

## H19.2.6 「続・精神科医（医療）と学校でできること、できないこと」とケース会議

## c 臨床心理士による「箱庭」に関する研修

講師 京都文教大学心理臨床センター専任研究員  
臨床心理士 串崎 幸代 氏(第1,2回)  
大阪大学大学院生 東井 申雄 氏(第2回)

## H19.2.1 公開講座「箱庭研修と思春期の特性」

## H19.2.9 「臨床の現場から～箱庭から見えてくるもの」

平成19年度については、過去2年間の活動を引き継ぐとともに、「箱庭」に関する教職員向け研修をさらに充実させ、心理に関する知識と教育相談活動技術のいっそうの教職員の能力向上に努めた。また、生徒に、さまざまなストレスに対応する力を身につけさせる「予防的なカウンセリングに関する研修」も実施した。

## a スクールカウンセリングスーパーバイザーによる研修 講師 臨床心理士 河井 美砂 氏

## H19.6.11 ケース会議

## H19.7.9 ケース会議

## H19.9.10 ケース会議

## b 精神科医による研修

講師 精神科医 明石 恵司 氏

H19.10.3 「受験期を健康に乗り切るには ～ストレスと睡眠のコントロールについて」  
(3年生対象の講演会)

## H19.11.7 「学校の教師から精神科医に聞きたいこと」(教員対象の講演会)

H20.1.16 「思春期の特性について」～医療現場から  
(教員及びPTA対象の講演会)

## c 臨床心理士による研修(生徒・教員対象)

講師 スクールカウンセリングスーパーバイザー  
河井 美砂 氏(第1回、第4回)  
千里金蘭大学講師

串崎 幸代 氏(第2回、第3回)

## H19.11.12 「ストレスマネジメントを学ぶ」～自尊感情を高めるために

## H19.11.21 「箱庭研修」～自己をうまく表現するために

## H19.11.28 「ソーシャルスキルを学ぶ」～他者との関係づくりに生かすために

## H20.1.21 「喪失体験と新しい目標設定のしかた」～自分の人生を振り返る

スクールカウンセリングスーパーバイザーを講師とする研修、「箱庭」を活用した研修、心理に関する知識と教育相談活動技術の向上をめざした研修などの3年間にわたる研修を通して、生徒に寄り添い、生徒を受け止める姿勢の大切さを知るなど教育相談に対する理解を深めることができた。

教育相談週間等への参加者数については、さまざまな参加形態があったため数値把握は行っていない。全体として捉えたとき、相談の回数といった量的変化ではなく、質的变化という点においては、教育相談週間での来室がきっかけとなり、相談室登校につながった生徒が現れるなど大きな成果が得られた。

## イ 進路相談体制の充実

まず、進路に対する生徒の意識を喚起する目的で、進路説明会の充実を図った。

平成17年度については、3年生を対象とした大学・専門学校等の外部講師(25名)による「進路別説明会」や2年生を対象とした奨学金に関する講演会を開催するとともに、1,2年生の保護者を対象に奨学金に関する学習会も行った。

平成18、19年度については、平成17年度の取組を継承し3年生を対象とした「進路別説明会」や2年生を対象とした奨学金に関する講演会を開催するとともに、外部講師による1年生対象の「進路全般講話」や2年生対象の「進路別説明会」を行った。さらに、平成18年度には、奨学金に関する相談窓口「スカラールーム」の開設、平成19年度には、PTAと連携して外部講師による「保護者向け進路説明会」を行うなど進路相談体制のいっそうの充実を図った。

進路相談室利用者以外に、担任による進路相談も多く、利用者数の正確な集約はできなかった。生徒個々への対応が最も問われる奨学金相談窓口「スカラールーム」の利用状況は、開設1年目(H18年度)には60件、2年目(H19年度)には100件を超え、このことから生徒・保護者の要望に十分に答えることができていると考えている。

また、このような流れを受け、1年生(総合学科の千里青雲高等学校)では、「産業社会と人間」の授業を中心に企業・施設・大学見学をグループ別で行うなど、キャリア教育の充実を通して、学習への動機付け、学習意欲の向上に努めている。

## (2) 教職員向け研修の充実

生徒への適切な指導を通して生徒の健全な成長と学習意欲の向上を図るうえで、思春期の生徒の特性について、すべての教職員が認識を共有し、課題解決に向けた多彩なアプローチを学ぶことが重要であると考えた。そのため、人権研修をはじめとするさまざまな教職員向け研修とリンクする企画として体系的な企画に基づいて実施した。

#### ア 平成17年度

10月20日 「暴力に頼らない問題解決法」

講師 NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西 事務局長 森山 順子 氏

3月1日 「境界線について」

講師 NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西 事務局長 森山 順子 氏

#### イ 平成18年度

7月7日 「思春期の子どもと向き合う～進路を話し合う前に」

講師 NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西 理事長 田上 時子 氏

12月4日 「中学校における人権教育の状況」

講師 豊中市立第十一中学校 校長 末本 直道 氏  
豊中市立第十一中学校 教諭 斎喜 慶三 氏  
豊中市立第三中学校 教諭 谷 延戒 氏

#### ウ 平成19年度

12月6日 「思春期の子どもの心の健康」

講師 千里金蘭大学 准教授 斉藤 富由起 氏

12月10日 「いじめ対策プログラムⅡ」

講師 NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西  
應地 由起英 氏  
包丁 高子 氏  
山田 ゆかり 氏

### (3) 授業の改善

授業に対する教員の資質向上だけでなく生徒の学習意欲の向上もめざして、平成17年度には「生徒への学習に関するアンケート（授業評価）」、平成18年度には「教員への授業に関するアンケート」、平成19年度には二度目の「生徒への学習に関するアンケート（授業評価）」と「公開研究授業」を実施し、授業の改善に取り組んだ。

#### ア 生徒への学習に関するアンケート（授業評価）

「生徒による授業評価」を含むこの「生徒への学習に関するアンケート」では、生徒が各科目の授業を評価するだけでなく、自らの学習状況を振り返り、今後の改善と学習意欲向上のきっかけとなるように質問を工夫した。平成19年度には、平成17年度のアンケートを踏襲しつつ、さらに踏み込んだ質問を加えたものを実施した。

平成17年11月に実施したアンケートの集計結果と平成19年11月に実施したアンケートの集計結果を比較し

て、生徒の変化を調べた。（平成17年1年生のデータと平成19年3年生のデータを比べると、生徒の経年変化を見ることができる）

「土日（休日）に、一番時間を費やしていることは何ですか？」について、その結果を表1. に示した。1、2年生では、クラブ活動を選んだ生徒が39%から48%へと増加し、高い部活動への参加率とともに、クラブの活性化が進んだことを示している。推薦入試などを受験する生徒が増加し、進路決定の時期が年々早まっている傾向が大きく影響した結果、部活動を引退して、進路実現をめざして本格的に学習に取り組む3年生の割合は、17%に低下した。

大きな質的变化としては、「ボランティア活動」をあげることができる。1年生段階での0%が3年生では2%と増加しており、本校での生活をもととしてボランティア活動へのきっかけを得、日常のあたりまえの活動として、一番時間を費やしていると答えられるように育ってくれたことは大きな成果である。

表1. 土日（休日）に、一番時間を費やしていること

| (%)      | 平成17年（1年次） |      |      |      | 平成19年（2年次） |      |      |      |
|----------|------------|------|------|------|------------|------|------|------|
|          | 1年         | 2年   | 3年   | 平均   | 1年         | 2年   | 3年   | 平均   |
| 勉強       | 0.4        | 1.2  | 26.3 | 9.1  | 1.9        | 1.8  | 17.0 | 6.6  |
| クラブ活動    | 39.0       | 39.5 | 2.0  | 27.1 | 48.3       | 46.6 | 3.6  | 33.7 |
| 友達と遊ぶ    | 25.0       | 20.7 | 25.1 | 23.6 | 19.6       | 14.9 | 29.0 | 21.1 |
| 家族と過ごす   | 6.1        | 7.0  | 6.8  | 6.6  | 3.8        | 3.6  | 6.7  | 4.6  |
| ボランティア活動 | 0.0        | 1.6  | 1.2  | 0.9  | 0.0        | 0.0  | 1.8  | 0.6  |
| その他      | 29.6       | 30.1 | 38.6 | 32.7 | 26.4       | 33.0 | 42.0 | 33.4 |

「現在の進路希望は何ですか？」については、その結果を表2. に示した。平成19年度の1年生では、「未定」の割合が半減し、2年生と同じような傾向を示している。「産業社会と人間」の授業を中心として、企業・施設・大学見学などのキャリア教育の充実を行っている成果が現れているものと考えられる。また、全学年を通して、四大・短大(理系)を希望する生徒の割合が増加している。

表2. 現在の進路希望（決定先）

| (%)       | 平成17年（1年次） |      |      |      | 平成19年（2年次） |      |      |      |
|-----------|------------|------|------|------|------------|------|------|------|
|           | 1年         | 2年   | 3年   | 平均   | 1年         | 2年   | 3年   | 平均   |
| 四年制大（文系）  | 29.4       | 46.2 | 44.4 | 39.8 | 46.6       | 48.6 | 44.0 | 46.4 |
| 短期大学（文系）  | 5.6        | 7.6  | 13.1 | 8.7  | 4.2        | 6.4  | 10.7 | 6.9  |
| 四大・短大（理系） | 11.9       | 6.8  | 8.3  | 9.1  | 15.9       | 11.4 | 14.2 | 14.0 |
| 看護・医療系    | 11.2       | 7.6  | 8.7  | 9.2  | 8.3        | 7.7  | 7.1  | 7.8  |
| 専門学校      | 19.0       | 16.3 | 20.2 | 18.5 | 12.9       | 14.5 | 20.0 | 15.7 |
| 就職        | 3.0        | 5.2  | 3.6  | 3.9  | 1.9        | 1.4  | 3.1  | 2.1  |
| 未定        | 20.0       | 10.4 | 1.6  | 10.9 | 10.2       | 10.0 | 0.9  | 7.2  |

すべての科目（授業）について、「授業の理解度」「授業の満足度」「授業への意欲」を尋ねた。また、平成17年度の「生徒自身の努力」にあたる質問として、平成19

年度には「課題の提出状況」および「授業中の集中度」という質問を設けた。さらに、新たな質問として「理解への対策」を尋ねた。

表3. 授業の理解度では、「よく理解できた」と「理解できた」を合わせた回答が、54%から61%へと増加し、それに伴って、表4. 授業の満足度の「非常に満足している」と「やや満足している」の合計も62%から71%へと増加している。

授業の満足度については、平成18年度10%増、平成19年度10%増をめざしていた。2年間で62%から71%へ変化したことは、年に7%ずつ増加することに相当しており、目標をほぼ達成できたものと考えている。

次に、表5. 授業への意欲を比較したところ、2年間で「基礎・基本的な内容でよい」が6%減少し、「今のままでよい」が6%増加していた。わずかではあるが、生徒の意欲の増大が感じ取れる。

表3. 授業の理解度

| (%)         | 平成17年(1年次) |      |      |             | 平成19年(2年次) |      |      |             |
|-------------|------------|------|------|-------------|------------|------|------|-------------|
|             | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| よく理解できた     | 14.8       | 14.0 | 16.3 | <b>14.7</b> | 15.1       | 18.2 | 24.2 | <b>18.7</b> |
| 理解できた       | 39.3       | 40.5 | 31.9 | <b>38.8</b> | 44.7       | 40.0 | 42.3 | <b>42.6</b> |
| 理解できない部分もある | 33.8       | 31.7 | 35.8 | <b>33.3</b> | 32.4       | 29.3 | 21.6 | <b>28.4</b> |
| 理解できなかった    | 12.1       | 13.8 | 16.0 | <b>13.2</b> | 7.8        | 12.5 | 11.9 | <b>10.4</b> |

表4. 授業の満足度

| (%)       | 平成17年(1年次) |      |      |             | 平成19年(2年次) |      |      |             |
|-----------|------------|------|------|-------------|------------|------|------|-------------|
|           | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| 非常に満足している | 14.9       | 14.5 | 15.8 | <b>14.9</b> | 14.6       | 17.0 | 23.4 | <b>17.9</b> |
| やや満足している  | 46.4       | 49.9 | 44.0 | <b>47.4</b> | 57.5       | 50.4 | 49.7 | <b>53.1</b> |
| やや不満である   | 26.7       | 22.5 | 23.4 | <b>24.7</b> | 20.1       | 20.0 | 14.2 | <b>18.4</b> |
| 不満である     | 12.0       | 13.1 | 16.7 | <b>13.0</b> | 7.7        | 12.6 | 12.7 | <b>10.7</b> |

表5. 授業への意欲

| (%)        | 平成17年(1年次) |      |      |             | 平成19年(2年次) |      |      |             |
|------------|------------|------|------|-------------|------------|------|------|-------------|
|            | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| もっと詳しく学びたい | 10.4       | 12.0 | 14.9 | <b>11.6</b> | 11.0       | 11.2 | 13.3 | <b>11.7</b> |
| 今のままでよい    | 51.5       | 53.3 | 46.6 | <b>51.6</b> | 59.6       | 53.9 | 57.9 | <b>57.3</b> |
| 基礎・基本的でよい  | 24.9       | 22.3 | 22.7 | <b>23.6</b> | 18.4       | 19.7 | 12.8 | <b>17.2</b> |
| 別がない       | 13.2       | 12.4 | 15.7 | <b>13.2</b> | 11.0       | 15.1 | 16.0 | <b>13.7</b> |

「生徒自身の努力」と「課題の提出状況」および「授業中の集中度」という授業に対する生徒の意識・関心の度合いを調べたこれらの回答の比較をする。表6. 生徒自身の努力の「全力で努力している」と「努力している」を合わせた回答が62%であったのに対し、表7. 課題の提出状況の「きっちりと提出している」と「ほぼ提出している」の合計が93%、表8. 授業中の集中度の「集中して授業に取り組んでいる」と「ほぼ集中して取り組んでいる」の合計が77%になっており、生徒の意識が大きく改善されていることを表している。

表6. 生徒自身の努力

| (%)         | 平成17年(1年次) |      |      |             |
|-------------|------------|------|------|-------------|
|             | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| 全力で努力している   | 12.8       | 12.7 | 16.2 | <b>13.2</b> |
| 努力している      | 49.8       | 48.5 | 44.2 | <b>48.6</b> |
| ほとんど努力していない | 29.4       | 29.2 | 29.8 | <b>29.4</b> |
| まったく努力していない | 8.0        | 9.5  | 9.8  | <b>8.8</b>  |

表7. 課題の提出状況

| (%)         | 平成19年(3年次) |      |      |             |
|-------------|------------|------|------|-------------|
|             | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| きっちりと提出している | 40.2       | 51.8 | 54.4 | <b>47.9</b> |
| ほぼ提出している    | 46.3       | 33.7 | 33.7 | <b>38.8</b> |
| ほとんど提出していない | 9.8        | 10.8 | 7.9  | <b>9.6</b>  |
| まったく提出していない | 3.7        | 3.8  | 4.0  | <b>3.8</b>  |

表8. 授業中の集中度

| (%)         | 平成19年(3年次) |      |      |             |
|-------------|------------|------|------|-------------|
|             | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| 集中している      | 24.8       | 26.0 | 28.8 | <b>26.3</b> |
| ほぼ集中している    | 56.0       | 48.4 | 45.7 | <b>50.7</b> |
| ほとんど集中していない | 15.0       | 18.8 | 16.8 | <b>16.7</b> |
| まったく集中していない | 4.2        | 6.7  | 8.9  | <b>6.3</b>  |

このような授業の理解度、授業の満足度、授業への意欲、授業への取組姿勢の向上は、本事業の取組が本校に大きな成果をもたらしていることを示している。

次に、平成17年度になかった質問として、学校以外での一週間の学習時間を尋ねた。その結果を表9. に示した。全学年において1時間未満という回答が最も多く、1、2年生では1～2時間の回答をあわせると、その割合は約66%となり、家庭での学習習慣が不足していることを表している。受験を控えた生徒がいる3年生では、その割合は50%を下回るとともに8時間以上の割合が大きく増加し、全体的にも1、2年生に比べ学習時間は増加している。

表9. 学校以外で、一週間に学習する合計時間

| (%)   | 平成19年(3年次) |      |      |             |
|-------|------------|------|------|-------------|
|       | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| 1時間未満 | 38.5       | 39.9 | 31.3 | <b>36.7</b> |
| 1～2時間 | 27.2       | 25.6 | 16.1 | <b>23.2</b> |
| 2～3時間 | 9.1        | 10.8 | 12.1 | <b>10.5</b> |
| 3～4時間 | 6.8        | 9.4  | 9.8  | <b>8.6</b>  |
| 4～5時間 | 5.7        | 4.5  | 4.5  | <b>4.9</b>  |
| 5～6時間 | 3.4        | 4.5  | 4.9  | <b>4.2</b>  |
| 6～7時間 | 3.0        | 2.7  | 3.6  | <b>3.1</b>  |
| 7～8時間 | 1.9        | 1.3  | 2.2  | <b>1.8</b>  |
| 8時間以上 | 4.5        | 1.3  | 15.6 | <b>7.0</b>  |

さらに、この学習時間について、生徒自身がどう考えているのかを尋ねた。その結果を表10. に示した。1、2年生では80%近く、3年生でも60%以上の生徒が、

自らの学習時間が不十分であると感じている。この生徒の気持ちを学習の動機付けや学習意欲に結び付けていくことが今後の課題である。

表10. この学習時間についてどう考えているか

| (%)       | 平成19年(3年次) |      |      |             |
|-----------|------------|------|------|-------------|
|           | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| かなり不十分である | 21.5       | 30.5 | 22.6 | <b>24.6</b> |
| 不十分である    | 55.8       | 48.0 | 38.9 | <b>48.0</b> |
| ちょうどよい    | 18.5       | 17.5 | 27.0 | <b>20.9</b> |
| 十分である     | 4.2        | 4.0  | 11.5 | <b>6.4</b>  |

表3. 授業の理解度で「理解できなかった」と回答した10%の生徒、表7. 課題の提出状況で「ほとんど提出していない」または「まったく提出していない」と回答した13%の生徒、表8. 授業中の集中度で「ほとんど集中していない」または「まったく集中していない」と回答した23%の生徒、表11. 理解への対策で「何もしなかった」と回答した29%の生徒の間には大きな相関関係が感じられる。このような生徒は「授業に集中していないから授業が理解できず、理解できないからやる気を失い、やる気を失って授業に集中できない」という悪循環を繰り返して学習意欲を失っていると思われる。この悪循環を断ち切ることが今後の大きな課題である。生徒に努力するよう働きかけ、学習に意欲をもたせるような動機づけが重要であると考えられる。

表11. 理解への対策

| (%)     | 平成19年(3年次) |      |      |             |
|---------|------------|------|------|-------------|
|         | 1年         | 2年   | 3年   | 平均          |
| 先生に質問した | 14.6       | 17.0 | 13.9 | <b>15.1</b> |
| 自分で調べた  | 22.9       | 23.1 | 31.8 | <b>25.6</b> |
| 友人に聞いた  | 29.1       | 36.7 | 27.3 | <b>30.9</b> |
| 何もしなかった | 33.4       | 23.3 | 27.1 | <b>28.5</b> |

#### イ 教員への授業に関するアンケート

平成17年度に実施した「生徒への学習に関するアンケート(授業評価)」の結果を踏まえて、教員側から見た授業に関するアンケートを平成18年度に行った。これらのアンケートは、授業を生徒と教員の両方から見直すきっかけとなった。

##### ① 現在の授業について

VTRやPCを用いて視聴覚的に働きかける工夫やプリントを用いて理解を深める工夫などさまざま努力がなされている。さらに、理解不足の生徒への指導として、特別課題やノート提出などが実施されている。一方、進学を視野に入れた講習も早朝や放課後に行われ、教員の努力がうかがえる。

##### ② 授業時の生徒の様子について

授業中の私語・居眠り・忘れ物などに不満が寄せられ

ている。注意しにくい生徒が増えたと感じながらも、基本的には繰り返し注意していくことが最善の方法であり、そうしていくことが大切であると考えている教員が多い。同時に多くの教員は、こうした対処療法だけでなく、生徒の興味・関心・意欲を高め、根本的に解決する方策も考えていかなければならないと考えている。

##### ③ 学習活動について

「生徒に対して、もっと伸ばしたい、足りないと感じているものは何ですか?」という質問に対する回答では、自分で考える力・表現力・感性・熱意・地道な努力・学習に対する意欲・集中力・探究心・積極性など生徒自身の精神性に関わる回答が半数を占め、次いで家庭学習・学習習慣・読書や新聞を読むことなどの回答が見られた。こうした点の改善策として、講習のいっそうの充実・少人数展開授業の実施・習熟度別編成の実施などが挙げられている。

「よりよい授業をつくっていくために、教員に求められているものは何ですか?」という質問に対しては、教師としての人間性と指導力という回答が圧倒的に多かった。人間性としては、広い知識・余裕のある心・バランス・熱意と工夫・信頼関係・情報の共有・人間としての魅力などが、指導力としては、分かりやすい授業・興味をひきつける授業・意欲を高める授業・勉強のおもしろさを実感させることなどが挙げられている。

さらに、このような人間性と指導力を獲得するためには、研究・研修・教材研究・授業内容の工夫が重要であるとの回答が多く見られた。

#### ウ 公開研究授業

平成19年度の11月20日に、1年生の「美術Ⅰ」において実施した。「音楽のイメージを平面表現する」というテーマに基づいて授業が構成され、コラグラフと淡彩画の技法も用いて絵と音楽をコラボレーションするという意味で斬新な取組であった。

この公開研究授業をきっかけに、お互いが気軽に授業を見せ合う自主的な研究授業が行われるようにしていくことが、今後の課題である。

#### (4) 地域との連携・交流活動

地域や本校の教育資源を活かした地域の人たちとの交流を通して、地域の力を借り地域との結びつきを強め地域に貢献することにより、「地域のリーダーとなる」という自覚を高め、生徒一人ひとりの自己達成感や自尊感情を高めることで、学校生活や学習への意欲の向上を図った。

なお、成果目標として、この取組に参加する本校生徒数1000人、中学校の教員数50人を設定したが、平成18年度には、生徒数1058人、中学校の教員数55人となり目標を達成することができた。

#### ア 小学生・中学生との交流活動



## ① 水泳部

豊中市小学校水泳大会において、平成4年から毎年模範泳法を披露している。高校生の泳ぎを間近で見せ小学生に驚きと感動を与えるとともに、生徒たちも日頃の練習成果を披露することで達成感を味わっている。

さらに、豊中市市民水泳大会にも選手及び大会運営補助員として参加している。生徒たちは豊中市内に在学・在勤する小学生から高齢者までの出場者と世代を超えた交流を行うだけでなく、大会運営に協力することによってボランティア精神の一端を学ぶとともに自己達成感や自尊感情を得ている。

## ② 男女バレーボール部

本校の男子バレーボール部と女子バレーボール部が中心となって、豊能地区・三島地区・大阪市内地区の中学校との交流試合を行っている。また、同じ中学校の1年生部員を対象に、バレーボール講習会も開催している。

この交流試合や講習会での運営の裏方やコーチ役として、生徒たちは自己の存在感を感じている。

## ③ 女子バスケットボール部

本校の女子バスケットボール部も豊能地区の中学校との交流戦を行っている。地域の中学校との交流を通し、生徒たちは大きく成長している。

## イ 地域との連携

## ① 高校生のための親学習「明日の親のための講座」

豊中地域家庭教育協議会との連携により、人と人とのつながりの基本を学ぶ「たまごのワーク」を、平成18年度から2年生の「保健」の授業で実施している。本ワークは、全国初の「教育系列」をもつ総合学科高校「千里青雲高等学校」で開講される「ペアレンティング（親学習）」につながるものである。また、大阪府教育委員会が開発した家庭教育教材「親をまなぶ・親をつたえる」を用いた初めての取組である。

また、平成18年度に開催した地域の若い保護者たちとの交流会には、21人の生徒が参加した。

## ② ライフセービング教室

学校の人的・物的資源を地域に提供し、地域との結びつきを強めるために、地域住民や保護者などを対象にしたライフセービング教室を平成18年度から開催している。日本ライフセービング協会に所属し日赤指導員の資格をもつ本校職員が講師となり、人命救助の心得や緊急時の対策について講義した後、救急手当てについての実践的な実技指導を行った。参加者からは好評を得たため、平成19年度には、参加者に日本赤十字社救命救急コースの受講証を発行するよう企画を充実させた。

## ③ 心肺蘇生法研修

豊中北消防署の協力を得て、1年生全員及び教職員を対象に毎年一回ずつ実施している。1年生については、

2時間連続の「保健」の授業で実施している。

## ④ その他

## a 校外清掃活動

毎年、1年生と2年生全員が、本校周辺と西側の千里緑地公園の清掃を行い、地域美化に貢献している。

## b 地域の行事への参加

部活動が中心となって、地元の夏祭りや文化祭への参加、地域にある養護学校との音楽交流会などを行っている。

## 2 生徒の変容について

## (1) 人間の心理に関する基礎事項を学ぶ研修への参加

平成17年11月に、本校配置のスクールカウンセリングスーパーバイザーであった八尾勝氏による、人間の心理に関する基礎事項を学ぶ研修を実施した。31名もの生徒の参加があった。心理学に強い関心と興味を持つ生徒が数多く存在することを示したことが、本校の継承校である千里青雲高等学校において、全国で初めて「教育」という系列を設置することにつながった。

## (2) 第一進路希望の実現率の向上

第一進路希望の実現率の向上をめざして、目標値を90%と設定し、進路相談体制の充実や授業の改善に取り組んだ。その結果を、四年制大学への進学希望について表12. に示した。なお、3年生の5月時点で四年制大学を希望した生徒数を希望者数とした。

本事業の1年次から2年次にかけて、実現率が大きく向上し、目標値をほぼ達成できている。これは、さまざまな取組の成果が表れているものと考えられる。

表12. 第一進路希望の実現率

|             | 希望者数  | 進学者数  | 実 現 率  |
|-------------|-------|-------|--------|
| 平成16年度      | 190 人 | 126 人 | 66.3 % |
| 平成17年度（1年次） | 160 人 | 122 人 | 76.3 % |
| 平成18年度（2年次） | 157 人 | 140 人 | 89.2 % |
| 平成19年度（3年次） | 158 人 | 138 人 | 87.3 % |

## (3) 遅刻者数の減少

生徒の規範意識の育成とともに、学習に集中できる環境を整え学習意欲の向上を図るために、遅刻者数の減少に取り組んだ。その結果を表13. に示した。なお、平成19年度（3年次）は2，3年生のみの在籍のため、他の年度についても比較のために、2，3年生のみの1クラス当たりの遅刻者数も示した。

本事業1年次の平成17年度においては、対前年度比28.8%の減少がみられ、目標の30%減少をほぼ達成することができた。しかし、その後の2年間については、目標の30%及び10%減少を達成することはできなかった。30%→30%→10%と減少すれば、3年後には元の44%になり、この目標設定に無理があったとも考えられる。

しかし、この取組によって遅刻者数が減少していることも事実であり、今後も取組を継続していきたい。

表13. 1クラス当たりの遅刻者数

|             | 全学年  | 2, 3年 | 対前年度比    |
|-------------|------|-------|----------|
| 平成16年度      | 340人 | 405人  | —        |
| 平成17年度(1年次) | 242人 | 276人  | — 28.8 % |
| 平成18年度(2年次) | 229人 | 274人  | — 5.4 %  |
| 平成19年度(3年次) | —    | 296人  | 8.0 %    |

#### (4) 部活動の活性化

部活動での頑張りが、生徒一人ひとりの自己達成感や自尊感情を高めることにつながると考え、部活動のいっそうの活性化を図った。

まず、80%の加入率をめざした。平成17年度72.3%、平成18年度73.2%、平成19年度70.8%で、わずかに目標に届かなかったが、これからも加入率の向上に努めていきたい。

また、加入率の上昇は、部活動成績にも結びついている。運動系、文化系を問わず、多くのクラブが意欲的に活動し、部活動の底上げとともに成績のランクアップに成功している。特に、水泳部は毎年、近畿大会や全国大会(インターハイ)への出場を果たし、公立高校の中ではトップクラスの成績を残している。

このような状況下で、各種選考会への候補選手等の被選出数も、目標の10名には届かなかったが、平成17年度に4名、平成18年度に8名、平成19年度に9名と、大きな成果をあげている。

#### 3 教育活動の改善状況(授業、特別活動等)

本事業を契機に、学校全体で授業評価に取り組むことができるようになった。平成17年度に実施した「生徒への学習に関するアンケート(授業評価)」では、総合的に授業や生徒の実態を分析するだけでなく、教科ごとのデータに基づいて、それぞれの教科で分析を行い、問題点を洗い出し、対応策について協議を重ねた。平成18年度には、その結果を踏まえて教員側から見た授業に関するアンケートを行った。このアンケートは、教員が生徒の実態や自らの授業について改めてじっくりと見つめなおすきっかけとなった。平成19年度に再度実施した「生徒への学習に関するアンケート」では、2年前に比べすべての項目で改善が見られた。本事業を契機とするこのような3年間の取組が、学校とりわけ授業に少しずつではあるが確かな変化を起こしていることを確信することができる。

また、教育相談体制が本事業を通してよりいっそう充実したものになり、新たな公開研究授業が本事業を契機として始まったことなど、本校における本事業の意義は大きい。

さらに、本事業への取組によって生じた前向きなエネ

ルギーは、少路高等学校との再編統合により創立された千里青雲高等学校の設立準備段階の取組に活かされていった。新しい学校で育てたい生徒像の設定、それに基づく学校目標の設定、教育課程の編成などにおいて、理想を高く掲げ、現実には妥協することなく、あきらめることなく可能性を最後まで追い求めていくなど、本事業で培われた学校改革への前向きな姿勢が大いに役立った。

この3年間で培われた、生徒のニーズに応え、生徒の自己達成感や自尊感情を大切にする生徒に寄り添った丁寧な指導を、今後の新しい学校づくりにも活かしていきたい。そのためには、相談体制の充実、授業改善、地域との連携・交流をさらに推し進めていくとともに、学校教育自己診断や授業評価を実施し、生徒・保護者のニーズと生徒の実態や学校の状況を的確に把握していきたい。

#### 4 外部との連携について

##### (1) 人間の心理に関する基礎事項を学ぶ研修

平成17年度に実施した、当時本校配置のスクールカウンセリングスーパーバイザーの八尾勝氏を講師とする3回の研修に参加した生徒の感想である。

- ・(エゴグラムについて)  
「性格検査で自分の意外なところに気がついた」  
「心理関係に興味があったので参加したが、実際にやってみると奥が深い気がした」
- ・(ストレスマネジメントについて)  
「手の中に気をためるのが難しかった」  
「リラックスした」
- ・(EQテストについて)  
「社会的な知能を伸ばす必要があると思った」

##### (2) 精神科医による研修

平成19年度に、3年生を対象に実施した「受験期を健康に乗り切るには ～ストレスと睡眠のコントロールについて」の講演会での生徒の感想である。

- 「これからの受験に向けて勉強だけでなく、心身ともに健康に気を使わないといけないと思った」
- 「ストレスはいろいろな病気につながっていることが分かった。ストレス発散と睡眠はすごく大切だと思いました」
- 「今後やってみようと思った対処法がいくつかあった」

##### (3) 高校生のための親学習「明日の親のための講座」

豊中地域家庭教育協議会との連携により、平成18年度から2年生の「保健」の授業で実施している、人と人とのつながりの基本を学ぶ「たまごのワーク」とともに、平成18年度に実施した「地域の若い保護者たちとの交流会」に参加した生徒の感想である。

- 「赤ん坊に泣かれて焦った。泣かれても何もできなかったので、自分が親父になった時には、いろいろ世話できるようにになりたいです」



「お母さん方の大変だった話を聞いたときは、やっぱり子育ては一人では無理で、周りが助けていかないといけないんだなと思いました」

「聞いてみたかった話をたくさん聞けてすごくよかったと思います。お母さんたちの苦勞話を聞いて、自分の母親に親孝行したいと思いました。ありがたいの一言を大切にしようと思います。今日は参加できてよかったです。ありがとうございました」

#### (4) 心肺蘇生法研修

毎年、1年生の「保健」の授業で実施している豊中北消防署との連携による研修に参加した生徒の感想である。

「二人に一つの人形があり、たくさん実習できてよかった」

「人を助けられたらいいと思った」

#### (5) 校外清掃活動

毎年、1、2年生全員で行っている清掃活動に対する、本校西側の千里緑地公園を管理するボランティア団体代表の方からの手記である。

東豊中高校の生徒の皆さんへ

広い千里緑地公園を13人の愛護会員で管理しています。公園は安全が第一で、次に美化でありゴミのない優しい公園が私達の願いです。毎日会員が巡回して不法投棄・危険箇所・樹木の給水や病気など、細かく点検しています。以前は、雑草にゴミ、不法投棄の山で、樹木は茂り放題、人の出入りもできず、恐れ所と言われていました。今日では賑やかな場所になって、高校生がよく園内を走っています。東豊中高校の各運動部員でしょう、公園内での行動が安全に大きな貢献をされています。生徒さんたちが公園の清掃をする話を聞き、池田ケーブルテレビに話しますと、「今時そんなよい学校があるのですか、是非撮影に行きます。」との返事で、有難く思いました。私は代表者として生徒さんたちに感謝しています。高校生の練習活動によって不法投棄もありません。公園内に屑籠ありません。愛護は安全確保と美化に取り組んでいます。1月には70本の植林をしました。東豊中高校は緑の多い学校で、よい環境に恵まれています。学校生活を元気で明るく楽しく過ごされることを願います。私たち愛護会も元気に美しい公園造りをめざして緑地公園の管理を続けていきます。

千里緑地愛護会代表 豊丸 五男

### V 事業の評価 (CHECK)

#### 1 評価委員会による評価と提言

##### (1) 取組目標の達成度に対する評価と提言

##### ア 学校生活を支援する相談体制の充実

生徒たちが相談しやすい環境を作るのが大切なので、生徒の視点に立ち、生徒に寄り添う指導をめざす取組は評価できる。相談室の機能が十分に発揮されたと思う。今後もいっそうの充実に努め、千里青雲高等学校に継承していった欲しい。

また、スカラールームの取組も評価できる。今後も取組

を継続していった欲しい。

##### (2) 成果目標の達成度に対する評価と提言

##### ア 第一進路希望の実現率の向上

第一進路希望の実現率 90%という目標をほぼ達成できたことは高く評価できる。継続して欲しい。

##### イ 遅刻者数の減少

学力向上と生活指導は車の両輪。一年次の遅刻者数30%減の目標達成は高く評価できる。今後も遅刻者数の減少を中心に生活指導に取り組んで欲しい。

##### ウ 部活動について

部活動への生徒加入率の向上(80%をめざす)、部活動成績の1ランクアップ、各種選考会への候補選手の被選出数(10人をめざす)については、部顧問の地道な指導が着実に成果をあげていることを高く評価したい。

##### エ 交流参加生徒数及び、参加中学校教員数の拡大

交流参加生徒1000人、参加中学校教員50人の目標が達成できたことは高く評価したい。小学生・中学生との交流活動やさまざまな地域との連携については、これからも続けて欲しい。

##### (3) 教育実践に対する評価と提言

##### ア 生徒への学習に関するアンケート(授業評価)

個別の授業評価だけでなく、生徒の意欲をどう高めるかが大切である。この点ではうまく工夫されていると思う。また、研修などを通して適切な方策について協議する機会を教職員が持つことが、成果をあげることにつながると考える。教科ごとにアンケート結果を分析し、問題点を洗い出し、対応策を協議している点を評価したい。

##### イ 教員への授業に関するアンケート

授業は教育活動の中心。教員への授業に関するこのような課題解決のための取組に期待したい。

##### (4) 外部との連携に対する評価と提言

##### ア 高校生のための親学習「明日の親のための講座」

これまでの教育課程にはなかったもので、斬新である。ぜひ、今後も継続、発展させていった欲しい。

##### イ 校外清掃活動と地域の行事への参加

若い世代の参画に感謝している。参加する生徒の達成感を重視し、意欲づけを行っている現在の状況が継続されるよう期待する。

### VI 今後の課題と改善点 (ACTION)

3年間にわたる本事業で根付いた「プロジェクトチームを中心とした取組計画の立案 → 学校全体での取組 → 評価委員会による評価・検証 → 改善」というPDCAサイクルを今後も維持していきたい。そのために、学校教育自己診断や授業評価を担当する部署を明確にし、学校組織の中にしっかりと位置づけるとともに、学校運営全般に対する外部評価機関として学校協議会を充実させていきたい。

また、本事業において大きな成果を収めることのできた教育相談体制については、千里青雲高等学校において

新たな分掌として「教育部」を設置し、継承、発展させていくこととした。

## VII 事業の達成状況一覧

| 課 題                   | 取組目標                                                                                                                                                    | 成果目標                                                                                                                                                                                            | 達成状況                                                                                                                                                                                                   | 評 価                      |
|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|
| 学校生活を支援する<br>相談体制の充実  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・進路や生活上の悩みに対する個別面談等の充実</li> <li>・教育相談週間の設定（年2回）</li> <li>・思春期の生徒の課題解決に向けた多彩なアプローチを学ぶ教職員向け研修の充実</li> </ul>        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育相談週間等への参加者数の拡大（1年次30%増、2年次10%増をめざす）</li> <li>・進路相談利用者数の拡大（1，2年次とも30%増をめざす）</li> </ul>                                                                 | <p>相談の回数といった量的変化ではなく、質的变化という点においては、教育相談週間での相談がきっかけとなり相談室登校につながった生徒がいるなど大きな成果が得られた。また、生徒個々への対応が最も問われる奨学金相談窓口「スカラーム」の利用状況は、開設1年目（平成18年度）には60件、2年目（平成19年度）には100件を超え、このことから生徒・保護者の要望に十分に応えることができたといえる。</p> | <p>目標を十分に達成することができた。</p> |
| 確実な学力を身に付ける学習環境づくり    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員への授業に関するアンケートの実施</li> <li>・生徒への学習に関するアンケート（授業評価）の実施</li> <li>・公開研究授業の実施</li> <li>・全教職員による登校指導期間の設定</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第一進路希望の実現率の向上（90%をめざす）</li> <li>・遅刻者数の減少（1年次30%減、2年次30%減、3年次10%減をめざす）</li> <li>・学校生活・授業満足度の向上（2年次10%増、3年次10%増をめざす）</li> </ul>                           | <p>取組目標として取り上げた内容をすべて実施することができ、予想以上の効果を得た。成果目標もほぼ達成することができた。</p>                                                                                                                                       | <p>目標を達成することができた。</p>    |
| 地域の団体・組織等との連携・交流活動の充実 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生・中学生との交流活動の充実</li> <li>・地域での交流体験の充実</li> <li>・大学等の高等教育機関、民間学習機関、福祉部局等の連携先の開拓</li> </ul>                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動への生徒加入率の向上（80%をめざす）</li> <li>・部活動成績の1ランクアップ</li> <li>・各種選考会への候補選手の被選出数の拡大（10人をめざす）</li> <li>・交流参加本校生徒数及び、参加中学校教員数の拡大（生徒数1000人、教員数50人をめざす）</li> </ul> | <p>取組目標および成果目標をほぼ達成することができ、生徒に自己達成感や自尊感情を獲得させることができた。</p>                                                                                                                                              | <p>目標をほぼ達成することができた。</p>  |